

(八) 暗闘の始まり

後世、アムリッツアの会戦の名で呼ばれる会戦は、数の上では同盟軍八個艦隊で戦艦艦艇の定数だけを計算すれば約一〇万四〇〇〇隻、一方の帝国軍はローエングラム元帥府に属する九個制式艦隊約一二万隻の参加する史上最大規模の大会戦だった。兵力の上では互角であり、しかもキルヒアイスが全兵力の三割、約三万隻を率いて迂回航路を採ったため、会戦の初動では帝国軍は同盟軍の約七割の兵力で戦わねばならなかった。

しかし、戦場がアムリッツアに移った時に健常な兵力と指揮系統を維持し得たのはヤン中将指揮下の第一三艦隊のみであり、歴戦の名将とされるビュコック、ウランフ、ボロディンですら、それぞれロイエンタール、ビットェンフェルト、ルッツの猛攻の前に戦力の過半を消耗させられ、ボロディンは戦死、ウランフも重傷で指揮を執り得る状態にはなかった。ある計算によれば、会戦冒頭、同盟軍で戦闘可能な兵力は定数の六割に満たなかったとされるほどである。

後世、『オーベルシュタインの焦土戦術』として喧伝されるのが、帝国軍の戦略的後退作戦である。帝国軍は帝国の領域の六分の一にわたる広大な辺境宙域から完全な撤退を行い、一切の戦略物資：食糧、燃料、日々の日常消費財に至るまでをすべて強制的に回収し、帝国領中心部へ持ち去った。同盟軍は占領地に食糧他の消費物資の供給を強いられ、補給路に過大な負担をかけられた挙げ句に疲労度が頂点に達したところを、ラインハルト軍に叩かれたために大敗した：これがアムリッツアの会戦に対する定説的な説明となっている。

実際には、同盟軍の戦力消耗と将兵の疲労に最大の効果をもた

らしたのは、ラインハルト軍による連続的な急襲作戦だった。長く伸びた同盟軍の艦列に対して、その間隙を狙って至近距離にワイプアウトすると同時に、最大戦速での一撃離脱を繰り返す。それぞれが一〇〇〇から最大三〇〇〇隻規模の高速機動部隊による、この作戦は最高度の戦術的洗練を要求された。主に指揮を執ったのはキルヒアイス、ロイエンタール、ミッターマイヤー：ローエングラム元帥府を代表する驍将達であったのはむしろ当然のことである。

作戦発起の段階から、艦列を長く伸ばしすぎることをへの危惧を抱いていた同盟軍の指揮官達は彼らの懸念が的中したことを信じ、襲撃ごとに艦隊規模での迎撃を繰り返した。無視すれば、帝国軍の急襲部隊は艦隊が伴う中小艦艇や、地上兵力の輸送部隊、補給船団へ執拗な攻撃を繰り返したために無視することも不可能だった。

兵力的に決定的なダメージを受けた艦隊は一つもなかった。最大の損害を受けたウランフの第一〇艦隊ですら、喪失艦艇は一〇〇隻弱、損傷艦艇は二〇〇隻に満たなかった。戦死傷者は約二万人である。八個艦隊全体では五〇〇隻弱が失われ、一〇〇〇隻余りが損傷を蒙ったが、総兵力の一パーセントを僅かに上回る損失でしかなかった。逆に、帝国軍に与えた打撃は撃沈一八〇〇隻、損傷二五〇〇隻に達したと見られ、作戦参謀のフォーク准将が『我、大勝利を上げつつあり』とハイネセンへ打電したほどだった。

唯一、帝国軍の作戦の真意を見抜いていたのが第一三艦隊のヤン中将であり、彼は艦隊の游弋を止め、とある恒星の公転軌道上に全艦隊を球形陣に配置した。帝国軍の急襲部隊は、大型戦艦と防禦シールド艦を最外縁に配置して、中小艦艇を内側に囲い込んだヤン艦隊の球形陣を突破できず、大型戦艦とシールド艦の防禦スクリーンの隙間から狙撃してくる巡航艦や砲艦の砲撃で一方的

に艦列を削り取られる状況に陥ったのである。

ヤン・ウェンリーは、帝国軍の狙いが同盟軍艦隊の補給物資の消耗であることを見抜いていた。かつ、比較的小型で小戦艦ですら凄まじい勢いで消費されていく戦艦用消耗品：レーザー水爆ミサイル、四のプラスターユニット、艦艇や艦載機の姿勢制御用推進剤、同じく磁力砲や磁力機関砲の弾体、および艦艇の整備交換用の部品類：の消耗こそが、真の狙いであることを。二〇〇にも及ぶ有人惑星の放棄すら、その意図を隠すための壮大な陽動だった。

ビュコック中将はヤンの意見を容れ、帝国軍の挑発への無用の反応を禁ずるべく、総司令部に意見具申を行ったが、作戦参謀フォーク准将は一言の許にこれをはねつけた。曰く『敵を見て戦わざるのは、同盟軍の名譽を汚す行為以外の何ものでもない』と。

「まったく見事だ……ローエングラム伯……」

ヤンの感慨は、『オーベルシュタインの焦土戦術』へ向けられたものとされているが、これもラインハルトの戦略の辛辣さに対する感想であつたと受け取れぬこともない。

会戦に先立って、帝国軍の各艦隊は同盟軍艦隊へ急襲を加えたが、数的には互角なはずの同盟軍はすでに帝国軍と互角に戦える状態ではなかった。キルヒアイスの手によって最後の補給部隊：グレドウィン・スコット提督の指揮する一隊が殲滅された時、ヤン艦隊以外の同盟軍艦隊の弾薬庫はほぼ底を突いていた。姿勢制御推進剤の不足から、ほとんどの艦隊はワルキューレに対抗すべきスパルタニアンを繰り出すことすら、もはやできなくなっていたのである。

いずれにしても、同盟軍による帝国領侵攻作戦は、その動員兵

力の七割が失われ、ヤン、ビュコック、ウランフを除く八個制式艦隊司令官の過半が戦死、あるいは捕虜となる大惨敗で終結した。特に、五人の艦隊司令官以外にも戦死した提督クラスの高級士官は実に三〇〇人余り、大佐と中佐の艦長クラスに至っては一五万人以上が未帰還者の名簿にその名を連ねることになった。その過半がアムリッツア会戦の最終段階、キルヒアイス艦隊による背面奇襲が成功した数時間の間に失われたものだった。後世、第二次ティアマト星域会戦の故事に倣い、『同盟国防省にとって絶望の六時間』と呼ばれるに至る。同盟軍の、帝国軍へ対抗可能な軍組織としての組織的能力は『同盟国防省にとって絶望の六時間』で完全に失われ、二度と復活することはなかった。

『同盟軍に回復不可能な軍事的打撃を与える』……ラインハルトの戦略的目標は最も劇的な形で、完璧に達成されたことになる。

『オーベルシュタインの焦土作戦』が、同盟軍部隊を帝国領の奥深くへ引き込んで分散させ、短期間に戦力の消耗を強いる上で、の巨大な効果をもたらしたことは事実である。キルヒアイスらの急襲作戦も、ひいてはアムリッツアでの大勝利も、焦土作戦なしには現実とならなかったことも確実である。

辺境の有人惑星三〇〇余から一切の食糧、日常消耗品を回収撤去させるといふ作戦は、当初、銀河帝国政府の忌避を買ったのだが、それは、実に四億の住民を飢餓線上に彷徨わせる非人道性の故ではなかった。作戦開始から同盟軍が回復不能の軍事的ダメージを被って帝国領から叩き出されるまでの期間は約五〇日。焦土作戦を短期に実現するために、半ば以上の星系では食糧品が惑星上で焼却された。ために、焦土作戦の犠牲者に対して、接収した食糧品その他を返却してその救済を図ることは困難だった。

最大の抵抗を示したのが帝国の財政当局であつたことは、この意味で不思議ではない。オーベルシュタインからの意見具申を許に、ラインハルトが要求したのは、『五億の民が向こう一年間を過ごし得るだけの食糧品他の、帝国軍による接収品の供給』だつたのだ。そのための経費を試算した財務省の係官は、計算機上に並んだ〇の数を前に目を剥いた。

「冗談ではない。たかが辺境開拓の平民どもを救済するのに、こんな途方もない財政支出ができるものか」

「手先の計算ばかり達者なだけで、大局を見ようともせぬ愚か者が！」

喚き立てる担当官の鼻先を、獅子の咆哮が強かにたたきのめした。

「この程度の金は、我が艦隊が一〇日も戦闘行動すれば吹っ飛んでしまう程度のものだ。その程度も計算できぬのか。それに、この作戦を完全に実施できれば、我が軍の損害は確実に九割以上も減少する。それによって帝国が獲得できる財政的なメリットにも気づかぬと言うのか？ 気づかぬなら貴様はその職に相応しからぬ無能者だ。気づいていてなお黙っているなら、皇帝陛下に対し奉り、不作為をもって不為をなす不忠者だ。貴様はどちらだ、答えるがいい。」

ラインハルトが初めて、帝都の行政府で発した怒気は、財務省の官僚たちの顔面から一気に血の気を吹き飛ばすに十分な激甚さと指向性^{ダイレクティビティ}とを兼ね備えていた。彼らが『顔が良いだけで、あとは運と姉の引きで出世してきた飾り人形』と馬鹿にしてきた相手が、実は危険極まる^{ツリッパン}有翼獅子であることに、彼らは初めて気づかされたと言っている。

蒼白になり、座席の中で凍結した一同の前に、ラインハルトは勝利を確信して、さらに言葉を継いだ。

「我が軍が完全な勝利を収めた後、勝利を下支えた無辜の臣民に對して、皇帝陛下の御名を以て救恤の手を差し伸べる。皇帝陛下の恩と正義を高からしむる、これ以上の策が他にあるというか」

実際にはローエングラム伯ラインハルトの名が救世主として辺境宙域に語り継がれることになる……そう思った人間はいただろうが、言葉にする者はいなかった。並の精神の所有者は無論、相当

以上の胆力を持ち合わせた者にとつても、彼らの面前で黄金の^{こがね}蠟を燃え立たせている怒れる獅子にまともに面を向ける勇氣……ほとんど無謀さと言つてもいい……を持ち合わせている者は皆無だった。

加えて、ラインハルトの提示した数字は論理的にも完全な整合性を備えていた。焦土作戦の犠牲者救済のための費用は、想定される損害許容率から計算される損失の一〇パーセントにも満たなかったのだから。

実は、ラインハルトのこの指摘によって初めて、帝国政府の実務担当者達は、これから何が起ころうとしているのかを数字のレベルで把握したのである。一〇万隻を遙かに上回る巨大な規模での侵攻を効果的に迎撃しようと言う以上、帝国軍の動員兵力も一〇万隻、兵員数は優に一五〇〇万人を要することになる。仮にこれまで帝国軍が使つてきた許容損害率三〇パーセント強の損害が実際に出たとすれば、失われる艦艇の再建と熟練將兵の養成に費やされる費用は国家予算の二〇パーセントを簡単に上回る巨額となる。しかも、これは臨時の軍事支出となり、既に国家予算の相当以上の割合を食いつぶしている軍事予算はそのままの比率で国家の財政を圧迫し続けるのだ。

対応を一つ誤れば、既に大きく傾きかけている帝国の財政そのものが完膚無きまでに崩壊する。ラインハルトの示したのは、その事実を現実のものとして生々しいまでに明示してみせる数字

だったのだ。

こうして、同盟軍迎撃作戦のための戦時特別予算が編成され、付帯する勅命がラインハルトに授けられた。従来の、年中行事のごとき帝国軍の軍事行動予算に十数倍する莫大な国費を、ラインハルトのほとんど独裁的な裁量に委ねる内容だった。

「予に異議はない。が、そちらたちは良いのか、これで？」

予算執行権限附与に関する勅命への御名御璽を求められた時、フリードリヒ四世はリヒテンラーデ侯爵に問うたと伝えられる。

「ごさいませぬ」

応答し、リヒテンラーデ侯は付け加えた。

「他に相応しき者がありませぬゆえに」

「異論を申すものとてない、か？」

「この宙域にはそれほど大きな貴族領はございませぬ。大部分が開発途上の直轄領にございます。少々、荒れましたところで、苦情を申し立てる者もおりませぬ」

「直轄領とは予の領地じゃ。予が領地が荒れたとて、たれの迷惑にもならぬか」

空気の抜けるような笑いで、皇帝は国務尚書を恐れ入らせた。

「は…ローエングラム伯は、荒廃は一時のこと。すぐに再建をなしてみせると約してございます。これには、そのための費用も参入されておりますれば——また、これほどの巨額ではありませぬが、予算の執行を統帥本部総長や艦隊司令長官の手に委嘱したこと、前例のないことではございませぬ」

「そうか、前例がないか」

この時、リヒテンラーデ侯は皇帝が言い違えた、と思ったという。彼は確かに前例があると断言したわけで、また近年、とみに衰えを見せてきているとは言え、フリードリヒ四世がそこまで老い朽ちているわけでもなかった。

だが、皇帝は言い違えてはいなかったのである。

国務尚書の慫慂に従って承認の花押サインを入れつつ、フリードリヒ四世は呟いたが、その声は決して可聴域に達することはない。「これが前例のなきことへの門戸を開くことになる…のやも知れぬが、たれも気づいておらぬ。予の他には…な。善きかな」

☆☆☆

ラインハルトも予想していなかった問題が生じたのは会戦の最終段階だった。

「無用だ」

通信士のもたらした本國オーストリアからの指示を、ラインハルトはにべもなくはねつけたのだ。シュタインホフ総帥本部総長の名でもたらされたその指示は、完全に戦線を崩壊させ、雪崩を打って潰走している同盟軍の後背を高速機動部隊で追撃し、一挙にイゼルローン要塞を奪回せよ、というものだった。

ラインハルトにしてみれば冗談ではなかった。

同盟軍艦艇の撃沈破総数約七万二四〇〇隻。艦隊要員だけで戦死傷者は一三〇〇万人を軽く上回る。これ以外にも二〇〇余の占領地に散らばった地上部隊数百万は退路を完全に断たれ、降服以外の選択肢はない。完全勝利と言えたが、帝国軍も無傷ではなかった。ヤン艦隊とやり合ったケンブ、ビットェンフルトの両艦隊の損失は大きく、特にビットェンフルト艦隊は全滅と言っているほどだ。交戦で、全兵力の一割強を失っているほどだ。他の部隊も、直接の損耗は少ないものの、戦闘用消耗品は完全に底を突いた状態まで戦い、兵は疲れ切っている。補給を済ませ、休養を取らせる必要があった。

「稼働可能な機動兵力を抽出するという手段もとれますが、無意味ですな」

オーベルシュタインは言う。一万隻や二万隻程度の兵力なら何とかなるだろう。それをキルヒアイス提督に預け、追撃を行わせるのも可能だが、艦隊の再編ができるころにはすでに同盟軍艦隊の大半は要塞に入っているか、回廊の同盟領側へ抜けているだろう。

「形をつけるだけで意味はありません。無視すべきでしょう」

「その通りだ。返電させよ。追撃は不要・不急と認む。帝都への帰還を許可されたし、とな」

『ブリュンヒルト』から超光速通信^{F T L}が帝都へ飛んだ。帝都まで数千後年余。超光速通信^{F T L}をもってしても中継が必要であり、多少のタイムラグは避けられないのだ。

その間に、ラインハルトは矢継ぎ早に命令を下していた。キルヒアイス艦隊を殿軍に、全艦をアムリッツアから離脱させ、最寄りの補給基地への航路を設定する。基地にたどり着く頃には、帝都からの回答が返ってきていることだろう。すでに、その時点で追撃などは統帥本部付き参謀官僚達の机上の空論として以外、意味を失っているはずだった。

『ブリュンヒルト』ブリッジの通信士がラインハルトを呼び出したのはその時だった。

「元帥閣下、キルヒアイス中将閣下から入電です。親展入電となっております」

「キルヒアイスが？」

「至急、元帥閣下とお話しされたいとのことですよ」

「分かった。こちらへ回せ……」

下がれと命じる前に、オーベルシュタインがラインハルトの傍らを離れ、参謀長席へ戻るのを視界の隅に確認し、ラインハルト

は遮音力場のスイッチを入れた。

キルヒアイスの旗艦『バルバロッサ』とのホットラインが開き、キルヒアイスの顔が浮かび上がる。心なしか、その顔が青い。

「私だ。どうした、キルヒアイス」

「今、『バルバロッサ』で傍受したのですが……『ブリュンヒルト』では何も受け取っておられませんか」

「なにをだ？」

『帝都から発せられたと思われる緊急電です』

「ちょっと待て、確認する」

ラインハルトは通信士官を呼び、ここ数時間の傍受記録を確認させる。回答は否定的だった。

「帝都からの通信を傍受したという記録はない。大体、傍受できない距離ではあるまい？」

「そう思うのですが、こちらの通信士は帝都からのものに間違いない。間違っていたら銃殺されても文句は言わないと言い張っています」

「まあ、いい」

ラインハルトの表情に苦笑が深くなった。

「どんな内容だ」

「それが……」

キルヒアイスは、彼らしくもなく大きく唾を飲み込む仕草をした。帝国軍中将、ローエングラム元帥府のナンバー2、不敗の驍将と呼ばれる彼が、そうすると一気に二〇歳の若者の表情に戻ってしまう。

だが、キルヒアイスのもたらした知らせは、ラインハルトすら愕然とさせるものだった。

『皇帝陛下……フリードリヒ四世陛下が亡くなりました』

「皇帝が……皇帝が死んだ、だと？」

『ええ、急性の心臓発作とのことですよ。』

「心臓発作だと……あの男には勿体ない」

コンソールが通信プレートを吐き出し、一瞥したラインハルトは吐き捨てた。奴が生きている内に皇帝の座から追放し、貴重なものを生きながらにして奪われることの苦しみを散々に味わわせてやるつもりだったのに……

今の段階で『皇帝の死』と言う驚くべき知らせを共有しても良い、とラインハルトが判断した人物は、ラインハルト自身とキルヒアイスを含めて五人。義眼の参謀長オーベルシュタインと帝国の双壁、すなわちオスカー・フォン・ロイエンタールとウォルフガング・ミッターマイヤーである。

皇帝の訃報の前にミッターマイヤーは表情を蒼白に凍り付かせたが、オーベルシュタインは顔面の筋肉一筋すら動かさず、ロイエンタールは目を微かに細めただけだった。

「帰還を急いだ方が宜しいのでは？」

口を切ったのはオーベルシュタインである。

「皇帝の死は予期されたものではないでしょうが、それだけに帝都では後継者争いが激化すること、万に一つも間違いありません。閣下を敵視する者たちは、閣下をできるだけ帝都から遠ざけておきたいと考えるではありませんよう」

「追撃命令の裏にも皇帝の死があると思うか？」

「ミューッケンベルガー元帥の頭越しに統帥本部から訓電が出ているのが不自然です。艦隊司令部は実戦部隊よりの組織ですが、統帥本部はより宮廷の権力者に近いわけですから、裏があると考えるのが当然でしょう。最寄りの泊地へ戻った際に、訃報が中継されていなければ、艦隊司令部と統帥本部は悪意を持って我らを戦

場へ置き去ろうとしていると解釈してよろしいかと考えますが、それまでのんびりと待っている必要もありますまい」

一〇万隻にも及ぶ大艦隊すべてに帰還態勢をとらせるには数週間の間が必要である。また、今のタイミングでそんな大兵力を帝都宙域に集めれば、それだけで反対勢力に『叛意あり!』との攻撃の口実を与えるだけのことである。

「先んずれば人を制すとも言う。ここは数千から一万隻程度の先遣隊を先に帝都へ送り込み、本隊は通常のやり方で後続するべきだろう」

蒼く刺すような光を湛えた左目と、深く沈み込む鋼の眼光を宿した右目が幾度か瞬く。同意を示して黄金の髪が上下に大きく動いた。

「よからう……キルヒアイス中将、卿が先遣隊を指揮せよ」

「はい、閣下」

「ミッターマイヤー、卿は麾下の艦隊とともにキルヒアイスの指揮下に入り、帝都へ向かえ」

「はい、光榮であります、閣下」

「閣下……」

オーベルシュタインの先遣部隊への同行希望は、一同を驚かせた。

「何を驚く？」

オーベルシュタインは言う。確かにリヒテンラーデ侯はローエングラム伯と協力態勢を取ることにについて賛意を示している。それは、侯が権力を維持する上においてローエングラム伯が武力での助力を申し出たからに他ならない。

「国務尚書はローエングラム伯の絶対的な味方ではない。風向きだけを見て去就を決める風見鶏ではない。ブラウンシュヴァイク公でも他の門閥貴族でもいいが、リヒテンラーデ侯の国務尚書

としての地位と権限を保証し、自らは実質的な権限を恣にする……その程度の頭が働く連中ならいてもおかしくない。我が軍の動き鈍しと見れば、後ろ手に門閥貴族どもと手を握ったところで何の不思議もないのだ。キルヒアイス提督にしても、ミッターマイヤー提督にしても、宮廷での駆け引きを好まれるとは思えぬが？」

「卿ならやれるというのか？」

ミッターマイヤーは挑戦的な言葉を投げつけたが、常の彼にもあらずや口調は弱い。自身が戦場の勇者ではあっても、宮廷工作の巧者でないことをみとめるにやぶさかではなかったのだ。「もともと候との折衝を担当したのは私だ。であれば最後まで責任を持つのは当然ではないか」

「いいだろう、オーベルシュタイン、キルヒアイスの部隊と同行し、あらぬ方を風見せぬよう、リヒテンラーデ侯の足下を縛り上げてくるがいい……それとキルヒアイス」

「はい、閣下」

「宮廷のことはオーベルシュタインの手に委ねるとして、それ以外については私の分身として行動せよ、いいな？」

「ええ、必ず——」

静かな微笑が応えた。

ラインハルトにはそれで十分だった。

戦艦『バルバロッサ』と『ペイオウルフ』以下、高速機動部隊約一万隻がラインハルト艦隊を離れたのは、翌一〇月二三日のことである。

さらに翌二四日、ラインハルト艦隊の主力部隊はゾースト泊地に入港する。同泊地でラインハルトを待っていたのは、同盟軍への追撃を命じるシュタインホフ元帥からの訓電だった。

「ぐる……か」

一読し、ラインハルトは笑い捨てた。

「いいだろう。そっちがその気なら相手になってやる」

メックリンガーを先任者に任じ、その麾下にケンプ、ルッツ、ケスラーの三名を配してゾースト泊地に残し、戦禍の復旧を初め、損傷艦艇の修理と脱落艦の収容、および万一の場合の同盟軍の反撃への押さえを命じた。

ラインハルトはただ単に帝都への道を急いだわけではない。彼がメックリンガーに与えた『戦禍の復旧』が、すでに彼の視線がアムリッツア後からさらにフリードリヒ四世の死後にまで及んでいたことを証して余りある。リヒテンラーデ侯ですらラインハルトの意図を完全には読み取れなかったというべきだろう。

アムリッツア戦後、ラインハルトは予定通りに大量に集積してあった支援助物資を焦土作戦の対象地域に運び込んでいる。同盟軍が供出した食糧も完全に底を突き、まさに飢餓のどん底へ落ち込みかけていた二億余りの辺境住民がこれで救われたわけだが、ラインハルトの策はそれだけではなかった。救恤物資の提供と歩調を合わせて、『作戦上の措置でやむを得なかった。皇帝陛下はよく危急に耐えた諸子の忠誠を誼給うものである』との宣伝が有りとあらゆるメディアを介して、繰り返し流された。

更には、ラインハルト軍の救援活動は、焦土作戦領域に接する広大な辺境領域から、帝国の中心部、所謂門閥貴族達の領有する領域にまで及んだ。

先年、領主が反逆者として討伐を受け、帝国直轄領に編入された旧クロプシュトック侯爵領もその内の一つだった。

旧クロプシュトック侯爵領では、ブラウンシュヴァイク公爵軍に破壊された統治機構やインフラの再建が進んでおらず、生活が困窮を極めていたから、ラインハルト軍による救援物資の提供は千天の慈雨と受け止められ、住民の大歓迎を受けたのも当然のことだった。

ラインハルトが、予期される天文学的な損失で帝国政府の担当者^をを脅し上げて、莫大な予算と独裁的な執行権を確保した真意がそこにあった。

彼は、単に同盟軍に再起不能の大打撃を与えるだけでなく、彼らを撃退した後の辺境宙域から帝国の中枢部に近く、かつ権力の空白が生じている領域までに事実上の支配権を確立しようとしていたのである。

この活動の過程において、イゼルローン回廊出口からフェザーン回廊出口に至る辺境宙域の治安維持にあたっていたカール・ロベルト・シュタインメッツ少将が、秘密裏にラインハルトとの交誼を求めて使者を派遣して来ており、ラインハルトとしてもこれには好意的に応じる予定だった。と言うより、シュタインメッツが連絡せざるを得ぬように策を巡らしたのがオーベルシュタインだった。

また、かつてラインハルトの『公正な』上司であったヘルムート・レンネンカンフ少将は、この時期フォーゲン泊地の駐留司令官として、今次の作戦ではラインハルト艦隊の後方補給の任に当たっていた。

レンネンカンフにとって、この地の司令官職は明らかな左遷人事であり、頑なに筋を通す彼の人物が有力貴族の嫌忌を買った結果だった。そしてまた、レンネンカンフは例によってただの帝国マルクも私^{わたくし}することなく、完璧な兵站補給でラインハルト軍の大勝利を支えた。

「小官はこのまま泊地に残り、叛徒に対する帝国防衛の最前線たる任務を継続したく希望致します」

その功績を盾にとれば中央への復職も望みしだいなところを、久闊を叙する挨拶もそこそこにレンネンカンフが口にしたのがその言葉だった。

「巨大な戦勝を得た現時点こそ、最も綱紀を正すべき時。小官をして、その任にあたらしめるべく、ご命令をいただきましたき所存であります」

「これあるかな、さすが我が正義の人レンネンカンフ大佐……だ」苦笑しつつも、ラインハルトはレンネンカンフの帝国への忠誠を認め、後日の登用を約している。レンネンカンフであればこそ、前例のないほど巨大な後方補給の任をも安んじて任せたラインハルトだったのである。

こうして、後方に完璧な手当を終えて後、ラインハルトは主力艦艇約三万隻を率いて帝都に向かう帰還航路に入った。『ブリュンヒルト』に従うはロイエントールの『トリスタン』、ワーレンの『火龍』^{サマンドル}、そしてビッテンフェルトの『王虎』^{ケーニヒス・タイガー}。特にビッテンフェルトは、アムリッツァでの名誉挽回を期し、僅か一〇〇〇隻足らずとなった黒色槍騎兵艦隊を率いて艦隊の先頭に立つ。帝国暦四八七年十一月一日のことである。